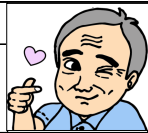


date : 年 月 日

学習内容：夏草-「おくのほそ道」から

学籍番号

氏名



おくのほそ道(冒頭)

「おくのほそ道」

松尾芭蕉

月日は^注百代の過客^{くわかく}にして、^①行きかふ年もまた旅人なり。
^②舟の上に生涯を浮かべ、^③馬の口とらへて老いを迎ふる者は、
日々旅にして旅をすみかとす。^④古人も多く旅に死せるあり。
予もいづれの年よりか、^注片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひ
やまず、海浜にさすらへて、^⑤去年の秋、^⑥江上の破屋に[☆]蜘蛛の
古巣をはらひて、やや年も暮れ、^⑦春立てる霞の空に、^⑧白河の
関越え^⑨むと、^注そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神
の招きにあひて、取るもの手につかず、^⑩股引の破れをつづり、
^⑪笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、^⑫松島の月まつ心に
かかりて、住めるかたは人に譲りて、^注杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

^注おもて
面八句を[★]庵の柱に懸け置く。

(冒頭)

【注釈】

百代の過客^{はくたいくわかく} 李白の「春夜桃李園に宴するの序」の冒頭の一節の引用。

夫天地者万物之逆旅、光陰者百代之過客。

夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。

そもそも天地はあらゆるものの旅宿のよなもので、月日は永遠の旅人のようなものである。

片雲 ちぎれ雲

そぞろ神 人の心に取りついてなんとなく人の心を誘い動かす神。

杉風 杉山杉風。芭蕉の門人。芭蕉の江戸出府と同時に入門し蕉門の基礎を

かためるとともに、芭蕉の経済面での庇護者ともなった。別墅Ⅱ採茶庵

面八句^{おもて} 俳諧連歌百韻を標す懐紙の初折り表の八句(一頁目の八句)

頁て表現するなら ① 8 ② 14 ③ 14 ④ 14 ⑤ 14 ⑥ 14 ⑦ 14 ⑧ 8 あわせて百

^注はくたいくわかく
百代の過客の意味

^① 行きかふ年 とは

^② 舟の上に生涯を浮かべ どんな者だろうか

^③ 馬の口とらへて老いを迎ふる者 どんな者だろうか

^④ 古人 とは芭蕉が敬慕する昔の詩人を指すのだが、誰であろうか。
四名あげよ。(この冒頭の部分から、二名は推測できるかも)

^⑤ 江上の破屋 とは「隅田川のほとりのあばら家」であるが、それは何。

^⑥ 春立てる霞 この部分に使われている表現技法とその説明

^⑦ む 助動詞「む」この場合の意味とは

^⑧ 股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより
とは何をしているのか

^⑨ 松島の月まつ心にかかりて
この部分に使われている表現技法とその説明

どんな月だと思えますか

・句の部分の「季語」「季節」

季語 季節

※応用題【考察】筆者芭蕉はこの冒頭で何を述べようとしたのだろうか。
・A なぜ家を譲ってしまったか。 ・B 面八句を懸けた意図とは何か。をいまえ考察しよう。

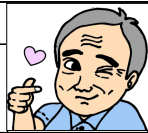
[☆]蜘蛛の古巣 の件を入れたのは
[★]庵 とは

date : 年 月 日

学習内容：夏草-「おくのほそ道」から

学籍番号

氏名



おくのほそ道(平泉)

三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まつ、高館に登れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は、和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠もり、功名一時の草むらとなる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と笠打ち敷きて、時のうつるまで涙を落としてはべりぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散り失せて、玉の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廃空虚の草むらとなるべきを、四面新たに囲みて、薨を覆ひて風雨を凌ぎ、しばらく千歳の記念とはなれり。

五月雨の降り残してや光堂

(平泉)

大門 — 平泉館の南大門(正面)
南部 — 南部地方(今の岩手県盛岡を中心とする地方)
義臣 — 忠義の臣(忠誠を誓う家臣(家来))
国破れて山河あり、城春にして草青みたり ↓ 「対句」表現
杜甫の「春望」の引用(国破山河在、城春草木深、)
兼房 — 義経の家臣(老齢である)

▽ 三代の栄耀とあるが、「三代」とは

◇ その栄耀の痕跡(名残り)二点

▽ 高館とは、

▽ 時のうつるまで涙を落としてはべりぬとは、どれくらいの間時間なのだろう。また、誰を意識しているだろうか。

▽ 夏草や兵どもが夢の跡の句 季語 季節

▽ 既に頽廃空虚の草むらとなるべきをとは何をひき合いにして述べたものか。

▽ 五月雨の降り残してや光堂の句 季語 季節
◎ この句に込めた感動とは

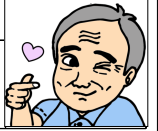
夏草「おくのほそ道」から
学習内容： 付録 I

date : 年 月 日

おくのほそ道 (松島)

学籍番号

氏名



(松島)

日既に午にちかし。船をかりて松島にわたる。其の間二里余り、雄島の磯につく。

そもそこふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭・西湖を恥ず。東南より海を入て、江の中三里、浙江の潮をたふ。島々の数を尽して、そばたつものは天を指さし、ふすものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり、三重に畳みて、左にわかれ右につらなる。負へるあり抱けるあり、児孫愛すがごとし。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹きたはめて、屈曲をのづからためたるがごとし。その気色、よう然として美人の顔を粧ふ。ちはや振神のおかし、大山つみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を尽さむ。

雄島が磯は地つづきて海に出でたる島なり。雲居禅師の別室の跡、坐禅石などあり。

はた、松の木陰に世をいとふ人も稀々見えはべりて、落穂・松笠など打けふりたる草の庵、閑に住みなし、いかなる人とはしられずながら、まずなつかしく立寄るほどに、月海にうつりて、昼のながめまたあらたむ。江上に帰って宿を求むれば、窓をひらき二階を作りて、風雲の中に旅寝するこそ、あやしきまで、妙なる心地はせらるれ。

松島や 鶴に身をかれほとぎす 曾良

よは口をとちて眠らんとしていねられず。旧庵をわかるる時、素堂・松島の詩あり。原安適・松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解きて、こよひの友とす。かつ、杉風・濁子が発句あり。

※ 午一方位でいうと南、つまり時刻では昼の零時
扶桑一中国で日本を指した言葉

明治図書「国語の学習3」(ワーク)40にも
松島のところが一部載っています。

▽「雄島が磯」の場面で、草の庵、まずなつかしく、江上に帰り

とあるが何を意識してのものか？

▽芭蕉は「松島」では句(発句)を残していない。その理由としてあげられるのが、「あまりに美しかったため」筆舌に尽くし難かったため」という見方である。そこで、別の捉え方はないか、考えてみよう。

(松島)

日はすでに南中に近づいたので、船を借りて松島に渡る。二里ほど船で進み、雄島の磯についた。

まあ古くから言われていて今さら言うこともないのだが、松島は日本一景色のよい所だ。中国で絶景として名高い洞庭・西湖と比べても見劣りがしないだろう。湾内に東南の方角から海が流れ込んでいて、その周囲は三里、中国の浙江を思わせる景色をつくり、潮が満ちている。湾内は沢山の島々があり、そそり立った島は天を指さすようで、臥すものは波にはらばうように見える。あるものは二重に重なり、またあるものは三重にたたみかき、左にわかれ右につらなる。

小島を背負っているように見える島もあり、前に抱いているようなものもあり、まるで親が子や孫を抱いて可愛がるようにも見ええる。松の緑はびっしりと濃く、枝葉は汐風に吹きたはめられて、その屈曲は自然のものでありながら、人が見栄えいように意図的に曲げたように見える。その気色、蘇東坡の詩の中で、西湖の景色を絶世の美人、西施が美しく化粧した様子に例えているが、この松島もほればれするほど奥深い憂いをたたえ、まさに美人が化粧したさまを思わせる。神代の昔、山の神「大山祇(おおやまのみこと)」が作り出したものだろうか。自然の手による芸術品であるこの景色は、誰かが筆をふるひ言葉をつくしても、うまく語れるものではない。

雄島の磯は陸から地続きで、海に突き出している島である。瑞巖寺中興の祖、雲居禅師の別室の跡や、座禅石などがある。

また、世の喧騒をわずらわしく思い庵を建てて隠遁生活をしている人の姿も松の木陰にわずかに見てとれる。落穂や松笠を集めて炊いているようなみすばらしい草の庵の静かな暮らしぶり、どういう来歴のかはわからないが、やはり心惹かれるものがあり、立ち寄りなりなどしているうちに、月が海に映って、昼とはまた違う景色となった。浜辺に帰って宿を借りる。窓を開くと二階作りになっていて、風と雲の中にじかに旅寝しているような、表現しがたいほど感慨深い気持ちにさせられた。

松島や 鶴に身をかれほとぎす 曾良
(この松島ではほととぎすはそのままの姿ではつりあわない。鶴の衣をまとうて優雅に見せてくれ)

(曾良は句を詠んだが)私は口をとぎし(句を詠まずに)、眠ろうとするが寝られない。深川の庵を出る時、素堂が松島の詩を、原安適が松が浦島を詠んだ和歌を饒別してくれた。それらを袋から取り出し、今夜一晚を楽しむがとする。

また、杉風・濁子の発句もあった。

芭蕉は当初「島々や千々に砕きて夏の海」と詠みましたが、この句が不満だったとみえて、「おくのほそ道」に残すことはありませんでした。

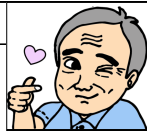
また、この松島の最後の件で、友人・門人が作った詩や句を、着が子守歌かにして眠れぬ夜の友とするところに、松島の光景に感動してきたものがあつたのか、私には疑問に思えるのです。ほんとに感動できる何かがあつたならば、何としても、句は残すものだと思うのですが……。

学習内容：夏草-「おくのほそ道」から
付録2-学習を楽しむ

date： 年 月 日

学籍番号

氏名



おくのほそ道(松島資料)-参考-



▽芭蕉が「松島」では句(発句)を残していない理由——別の捉え方

▽芭蕉は忍者(隠密幕府のスパイ)だったのではないか、といわれるが、別の捉え方

▼芭蕉の目指した理念について(芭蕉の美的価値観)

不易流行

「不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず」という芭蕉の俳論をまとめた弟子「向井去来」の書物『去来抄』の一節

変えてはならない伝統やしきたりを知らなければ、基礎が成り立たず、かといって時代の変化に沿った新しさも知らなければ、新たなものは生まれやしない。

【私の見解】

芭蕉と言えば、「蕉風」といわれますが、「蕉風」の奥義とは何かと問われれば、漠然としていて、感覚的に理解しづらいものなのでしょ

う。去来が師である芭蕉から読み取った「不易流行」は、芭蕉が追いつめた真理であったと思います。

芭蕉が師と仰ぐ宗祇が俳諧連歌がお茶にかけていく中で、格調高いものへ戻したと同様に、芭蕉も自分の時代の中で、滑稽に偏る俳諧を変えようとしたのです。ただし言葉遊びの中には「言いえて妙」といえるところもあり、流行しているものを排除したわけではなかったと思います。軸(芯・信念)ははずさず(変えてはならないところは変えることなく)、変化の中で、新たな前向きな美しさを求めたと思います。「無常観」が、はかなくもせつないものに定着する中で、変わって行く「時」の中にみえる明るさ、美しさを求めた「時の旅人」が芭蕉であると思っています。

変わらぬものを抱きながら、変わるものに耳を澄ませる——それが、芭蕉の旅の姿勢であり、私たちの学びの姿勢でもあるのでしょう。